スズメたちは西へ飛んでいった

西本美彦

留学生として東ベルリンに着いたのは、あの東西ベルリンを分断する「壁」が一九六一年八月十三日に造られてから十日ほどしか経っていなかった。ほかの留学生たちは、労働組合運動の強者たちだったが、私はまだ二十歳になったばかりで、マルクスのマの字も知らなかった。私たちが泊まったホテルのすぐ前にも壁が伸びていた。翌日の午後、みんなはホテルのすぐ近くにあった質素な公園のベンチに座り、くすんだ街並みを眺めていた。数羽のスズメが公園の砂場の砂に体を沈め、羽根を大きくふくらませ、砂浴びをしていた。それを見て、ある留学生が感激して言った。

「素晴らしい。社会主義の国では、スズメでさえこんなにまるまると太っている」

そのときシェパード犬を連れた兵士達が公園の前を通って行った。すると犬に驚いたスズメたちがパッと飛び立った。空に向かって。そう、西ベルリンの空に向かって。八月だというのにもう肌寒く、分厚い灰色の雲がベルリンの空に淀んでいた。

数年前のことである。ある有名な新聞に「冷戦、母子の心にも壁」と題した写真入りの記事が載っていた。写真のドイツ女性を見たとき、むかし、ベルリンのウンター・デン・リンデン大通りに面した国立図書館で、知り合った女性であることに

にしもと　よしひこ

高知県生まれ。1961年―1971年、ベルリン・フンボルト大学在籍。2004年、京都大学大学院 定年退職。現在、ボケーッと生存中。研究活動：すこしはあり。文芸活動：まったくなし。

すぐ気づいた。

新聞の記事によると、その女性は夫にかけられたスパイ容疑の捜査が自らの身に及ぶ危険を感じ、二歳の息子を両親に託して、東ベルリンを脱出したとある。西側で彼女は息子を取り戻す運動を始めたが、息子は強制的に秘密警察幹部の養子にされていたことを知る。その後彼女は強制養子問題に取り組んで活躍している。その息子は、壁が崩れる前の一九八七年に、母親が西ドイツにいるという理由で西側への移住を認められ、母親と再会している。ところが息子と母との間には複雑なわだかまりが続いている。

その母親に対し息子は、「自分が犠牲者だったとアピールするために『可哀想な息子』像を勝手に作り上げた」と言って反発している。母親は、「でも、私は彼が西側に来る手段になった。そう考えれば、私も彼を愛する必要はないのかもしれない」と不可解な弁明をしている。

一見東西ドイツの壁が生んだ悲劇のように読めるこの記事だが、その舞台裏には、

ベルリンの壁 1968 冬―自宅の窓より

もっとどろどろとした人間の生きざまが隠されている。

まず、この新聞記事のドイツ女性の言い訳には大きな嘘がいくつもある。そもそも彼女には夫なんかいなかった。息子は、西ベルリンの出稼ぎ労働者であったギリシャ人との間に生まれた子である。息子には、古代ギリシャの偉大な哲学者の名前が二つも付けられているので、今でも忘れていない。しかしそのギリシャ人との婚姻許可は下りなかった。また東独脱出の前に彼女の身になんらかの危険らしいものが迫っている様子もなかった。脱出を実行する前に、彼女は私にトリッキーな脱出の手口について誇らしげに語っていたのを今でも覚えている。彼女によると、まず西ドイツの女友達に、ほとんど同時刻にワルシャワ空港から西ドイツの異なる都市に飛ぶ航空チケットを二枚用意してもらい、ほぼ同じ時刻に東ベルリンに向かうためのチェックを済ませた彼女は、二重の搭乗手続きをして搭乗口のロビーで待っている西ドイツの女友達から、西ドイツ行きのチケットを一枚受け取り、そのままそれぞれが西側の都市に向かって飛ぶというわけである。当時はコンピューターによるチェックなどもなく、彼女はまんまと西ドイツに脱出したのである。

自分の両親にはたしか一週間ほどポーランドに行くと言って出発している。息子を預かった両親は、彼女の脱出計画についてなにひとつ知らされていなかったと言っていた。一言で言えば乳飲み子を置き去りにして、自分だけ西側に逃亡したというのが唯一の事実である。

ともあれ、まだ二歳の我が子を捨てて、西へ脱出したこの女性は、東西の壁が崩れた今でも自分の東独脱出を正当化し、嘘を積み上げて自己弁護をやめないのは、彼女の徹底したエゴなのか、それとも人間の心をそれほどまでゆがめてしまった壁の存在なのか、私には判断できない。どちらにしても悲劇であることには違いはない。

東西ドイツを分断する壁の存在は、たしかに人の心までむしばんでいった。特に若者たちは壁と対峙しながら、精神的に窒息しそうな空間の中でもがいていた。私の友人達もこの宿命に翻弄され、それぞれがこの宿命に命をかけて挑戦していた。

まずは神学部の学生のマンフレッド君のことが思い出される。私は彼に頼まれて、西ベルリンに住んでいる彼のお姉さんを訪ね、マンフレッド君のために買っておいてくれた『ヘブライ語・ドイツ語辞書』をもらいに行くことになった。日本のパスポートを持つ私は西ベルリンへの出入りが自由であった。ところがその日に限って、税

関の厳しい検査を受け、カバンの底に隠していた辞書を発見されてしまった。西側の書物を東独に持ち込むことは禁止されていた。仕方なくその辞書をお姉さんのところに返しに行くしかなかった。その翌日マンフレッド君に会って、ことのいきさつを話した。彼はただ深々とうなずいただけであった。そして一月ほどした頃、マンフレッド君が自室で首つり自殺をしたという知らせが届いた。自殺の直接の理由は誰にもわからなかった。彼の葬儀について何も知らされなかった。私はただ彼に辞書を渡せなかったことが今でも残念でならない。

カタリーナ嬢も私の友人グループの一人であった。　大学教授を父親に持つカタリーナ嬢は才女で、アラビア語を専攻していた。ところが卒論の作成が迫ってきた頃、忽然と私たちの前から姿を消していなくなった。友人のヴェルナー君の話では、カタリーナ嬢は東独の人が旅行できるルーマニアまで行き、警備も少ない夜中に旧ユーゴスラヴィアとの国境をなす河を泳いで渡り、対岸の旧ユーゴスラビア側で待ち受けていた兄達に保護されたという。見事な脱出である。西ドイツに行った彼女からは、その後一度も連絡はなかった。

東ベルリンから西ベルリンへまさしく瞬間移動した者もいる。神学部を卒業し副牧師として修行をしていたウルリッヒ君だ。彼は結婚していて、幼い子供もいた。その家族が一夜にして西ベルリンに移住したのは驚きだった。そのカラクリはいとも簡単である。ウルリッヒ君は西の教会団体に働きかけて、東独政府に身代金を払ってもらい、家族三人で一夜の内に西ベルリンへ移動したとのことである。　手っ取り早く言えば人身売買である。その後彼が西ドイツで牧師になったかどうか、私は知らない。

先にヴェルナー君の名前を挙げたが、彼は私の大切な親友の一人で、おなじ文学部の同窓生でもある。私が帰国して、半年も経たないときに、彼の妹から日本の私のところへ速達が届いた。速達には、ヴェルナーがルーマニアから旧ユーゴスラビアに逃亡しようとして、ルーマニアの国境警備兵に捕まったとある。彼は東独で裁判にかけられ、懲役二年の判決を受け、今服役中だと書いてあった。先に話したカタリーナ嬢とまったく同じ手法を用いたのだ。ただ彼はついてなかった。

さらに半年あまりして、ヴェルナー君から手紙が来た。投函した場所は西ドイツのハンブルクとなっていた。彼の話によると、投獄されて数ヶ月後、東西ドイツのスパイ交換の際に、彼も西ドイツへ追放されたとのことであった。その後八十年代

の初めに、私はハンブルクでヴェルナー君と再会した。彼の話によれば、私が東独に滞在している時に脱出を企てると私に迷惑がかかるので、私が日本に帰国するまで計画を実行しなかったと言ってくれた。

一九八九年十一月十日、東西を二十八年余にわたって分断していた壁はあっけなく崩壊した。西への旅行も自由になった。西側の本も読めるようになった。誰もが歓喜にあふれていた。しかし私の周りでは、壁の崩壊が皮肉にも新しい犠牲を求めたのである。

やはり私の親友で、神学部を卒業し、牧師を目指していたマテウス君は敬虔なクリスチャンであった。彼は口癖のようにこう言っていた。

「東独の民衆が、このように悩んでいるからこそ、私はここに残って牧師にならねばならない」

言っていたとおり、彼は東ベルリンの近郷の小さい教会で信者に信頼される牧師となっていた。彼の娘はアンネといい、もう二十歳になっていた。壁が崩壊したあと、西ドイツを初めて見物するため友人たちとシュツットガルト方面に車で旅行に出かけた。数日後、ベルリンに帰る途中のアウトバーンで交通事故に巻き込まれ、乗っていた車が炎上し、アンネほか同乗者全員が焼死したとのことである。東独の圧政に耐え抜いて、やっと手に入れた自由が非情にもマテウス君の娘の命を奪ったといえる。私には彼を慰める言葉も浮かんでこなかった。

ハンブルク在住のヴェルナー君は、ポーランド国境に近い町にある実家に戻ることを希望していた。彼の両親や妹が彼の里帰りを歓迎してくれることになった。晴れて我が家に帰る準備をするため、彼はハンブルクの自分のマンションへとバイクを飛ばした。翌日、ハンブルク方面へのアウトバーンで、左足がちぎれとんだ彼の死体が発見された。彼が上機嫌になってスピードを出しすぎていたのか、それとも事故に遭ったのか、今でもわかっていない。

貧しくて日本では大学進学などできなかった私は、東独、正式にはドイツ民主共和国が存在したからこそ、大学で学ぶことができた。帰国してもう四十数年が過ぎたというのに、命がけで壁に挑んだ友人たちのことが脳裏を過ぎり、未だに東独への適切な感謝の言葉が見つからないでいる。